

■第27回院内集会を開催しました



12月10日（火）午前11時から参議院議員会館103号室で第27回の院内集会を開催しました。出席者はゲストを含め45名でした。

はじめに行動隊の結成時から院内集会のお世話を下さっている牧山ひろえ参院議員（民主党）から、「今国会を終えて」と題し、特定秘密保護法の委員会採択における奮闘談、福島第一原発に関して内閣に提出した二つの質問主意書についてお話を伺いました。

続いて今回の集会の主目的である「いま行動隊は何をなすべきか」についての討論会に移りました。

はじめに平井吉夫理事から、前回の院内集会（10月24日）では時間切れのため討議できなかった問題提起と11月1日に行われた学習会でのそれに関する議論の紹介がありました。

その後、伊藤邦夫理事から「退職高齢者の被ばく労働従事を考える」と題した行動隊の「セールスポイン

ト」に関する論考、佐々木和子副理事長からこの間に寄せられた隊員各氏の意見の紹介があり、ほぼ1時間半にわたる討議に入りました。

他のボランティア団体との提携、国際廃炉研究開発機構とのコンタクト、福島県内における拠点の設置、財政確立のための本格的な部署創設、「本来の活動」と「周辺活動」との区別を考えなおす等々、さまざまな発言がありましたが、最も沸騰したのは事故収束作業を担う事業主体をめぐる議論でした。

つづめて言えば、行動隊が作業に参入するのは国家プロジェクトでなければならないのか、東電主体の多重下請け構造でもシニアに適切な作業があれば参入を求めるべきなのか、という議論です。

院内集会は議決機関ではなく、隊員が意見を交換する場ですが、ここで討議された問題は決着を急ぐことはないにしても、これからの行動隊の「行動」を考える上で重要な論点になるでしょう。

なお今回の院内集会には桜井宏衆院議員（自民党）と福島県双葉町の井戸川克隆前町長が出席され、ご挨拶を受けました。



桜井宏議員



牧山ひろえ議員



井戸川克隆前町長

原発ウォッチャー報告（2013年11月分）

項目	東電発表内容	原発ウォッチャー所見
原子炉の冷却	総合的に冷温停止状態を維持と判断する。水素爆発リスクの低減を図るため圧力抑制室上部に窒素ガス封入を実施している 水処理設備の負荷低減のため、原子炉への注水流量低減の可能性の一つとして、燃料デブリの冷却にあたり、現行の水冷方式の代替手段として、空冷方式の実現可能性について概略評価を実施	現段階ではデブリの存在場所、分布が不明であるので時期尚早の評価である
滞留水処理	循環ループ縮小に関わる淡水化装置を建屋内に新設することを検討 汚染水貯水量の推移を4ケースで予測：いずれも2014年度下期末にはALPS処理でβ核種除去された塩水が貯水量の7～9割を占める。また、地下水バイパスとサブドレン稼働がなければ（ケース3）H27年度上期には貯水量が80万m ³ を超える汚染水貯留タンク群の管理強化について、コンクリート堰の嵩上げを行ってタンク漏えいに備え、併せてレーダー式水位計を設置して水位監視を開始する。堰からの排水路を概要から港湾内に付け替える工事を行い、排水路の連続監視モニタを設置する 多核種除去装置（ALPS）について、C系統のタンク・吸着塔の腐食に対しゴムライニングや犠牲陽極板を設置し耐食性を確認。12月中旬以降3系統が順次処理運転に復帰予定	1-3号炉に個別の汚染水処理設備系を設置する方向は合理的である ALPSの安定的・連続稼働が前提であるが、ALPSの現状は楽観を許さない。80万m ³ を超えて貯水する対策も講じておくべきである
使用済み燃料	11/18 使用済み燃料プール内燃料取出し開始（～2014年末完了目標） 11/18～11/22で未使用燃料22体を共用プールに移し、一連の作業を評価し、11/26から使用済み燃料の優先的取出しを開始した	どのようなリスク管理を行っているかの記述なし
除染	平成26年度より、R/B内1階において、PCVの補修に向けた調査等の建屋内作業を開始予定。現在、R/B内は高線量であり長時間の作業が困難であるため、無人重機によるガレキ撤去、遠隔操作装置等による線量低減作業を行い、環境整備を実施	

■「フランジ型タンク」のどこが問題か？

福島原発行動隊には、福島第一原発の事故収束作業の進行状況を分析・調査している「原発ウォッチャー・チーム」が置かれています。12月11日、滝野川事務所チームの定期検討会が開かれました。会合の合間に、チームの協力者であるM氏に編集部がインタビューをおこないました。その一部を紹介します。

編集部： 今月の原発ウォッチャー月例報告（行動隊ウェブサイト）に全文が掲載）の中で、汚染水が漏洩したタンクに関する記述がありますね。もう少し詳しく説明していただけませんか。

M： 漏洩したのはH4エリアと呼ばれるタンク群の一つです。解体検査の結果、漏洩箇所の推定はできたのですが、報告書の中に大変気になる記述がありました。このタンクはフランジ型と呼ばれるタンクで、鋼板をボルトで締めて接合するタイプのものです。そのボルトが緩んでいたのですね。

編集部： 山田理事長も当初から、「汚染水を保管するタンクに溶接タンクではなくフランジ型のタンクを使うのは非常識だ。絶対に漏れる」と指摘していましたよね。



M： ええ、しかも問題なのは、漏洩部のボルトだけが緩んでいたのではない、ということです。ボルトの締め付けトルクは建設時が950N・m（ボルトを締めるスパナの柄を1mにして95kgの力を掛ける）だったのですが、漏洩部ボルトの確認値は100N・m、240N・mと、初期値の4分の1程度に落ちていました。一方、漏洩部以外のボルトはどうだったかという、締め付けトルクの平均値は202N・mだった。つまり漏洩した箇所と差異がないんです。

編集部： 言い換えれば、漏洩した箇所も、そうでない箇所もいずれもボルトの締め付けが大きく緩んでいた、ということですね。

M： そうです。何しろ、容量が1,000立米で、タンク底部（12m径、113m²）には1000トンと大変な重量がかかりますからね。その圧力でボルトが緩んでくる。そして緩んだ所から水が漏れた。

編集部： そうだとしたら、またどこからか漏れる可能性があるわけですね。

M： そういうことです。しかも深刻なのは、それが増し締め不能の場所であるということです。

編集部： どういうことでしょうか。

M： 側面であれば、緩んでもまた増し締めできるわけですね。でも、タンクの底面は増し締めができない。

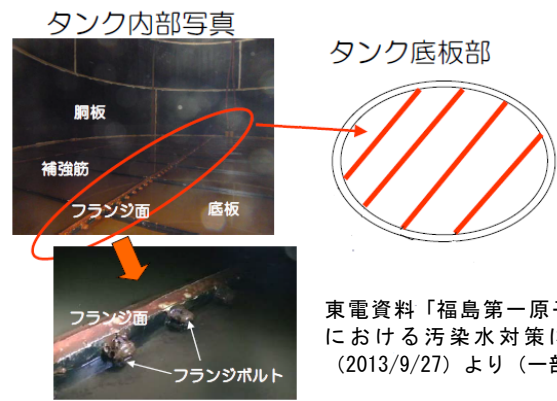
編集部： 底面は一枚の鋼板ではないのですか。

M： それは無理ですよ。トラックで運べませんから。鋼板は約2.5メートル幅で、これを5枚つなぎ合わせてボルトで留めています。

編集部： それではどんな対策を取っているのですか。

M： 東電はフランジ型から溶接タンクへ置換する計画です。漏れる可能性が大きなタンクから優先的に。た

タンク底板部の構造



東電資料「福島第一原子力発電所における汚染水対策について」（2013/9/27）より（一部加工）

だそれには時間がかかりますから、暫定対策として、タンク底部へのコーキング止水とタンク弊部へのシーリング材充填を行うとしています。本来なら基礎をしっかりと作ってその上にタンクを乗せるのですが、基礎がちゃんとできていない。そこで地面とタンクの間隙に隙間ができないようにシーリング材を流し込むというのですが、果たしてうまくいくかどうか。

編集部： その他の対策としては？

M： 水漏れに備えた堰の嵩上げですね。タンク20基を単位に、その周りに堰を作っていますが、その堰を嵩上げして、タンクから水が漏れても堰で食い止めよう、というわけです。堰内貯水容量は、タンク20基あたり1基分が基準とされています。

編集部： ということは、タンク1基から水が全部漏れても堰で食い止められるというわけですね。でも先ほどのお話では、どのタンクも同じようにボルトが緩んでいるわけですね。漏れるとしたら何基かで一度に、という可能性がありますよね。

M： その通りですが、「1基分ちゃんと食い止められるよう堰を嵩上げしました」と説明すれば世間的には何となく通ってしまうのかも。

編集部： あくまでも一般向け説明の「対策」ですか。

M： 東電の報告書は確かに嘘はついていないんだけど、大事なことを大事だと書かずに、さらっと流してしまう傾向がありますね。ご本人たちは大事だと気がついているのでしょうか。

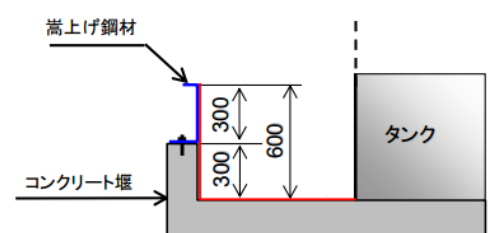
編集部： 今後の見通しはどうですか。

M： 大局的には、多核種除去装置（ALPS）が定常稼働を始め、IAEAが示唆したように処理後水を外洋放出できるようになれば「汚染水問題」のトンネルの出口が見えてきます。それまでの1年余はタンクのパトロール監視を慎重かつ厳重に行うべきでしょうね。

編集部： そう

した意味では原発ウォッチャーの役割はとても大事ですね。ありがとうございました。

鋼製板による嵩上げ状況図



東電資料「福島第一原子力発電所の緊急安全対策 参考資料」(2013/11/8)より（一部加工）